慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	葬送・ 墓制の民俗学的研究
Sub Title	
Author	岩田, 重則(Iwata, Shigenori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006.) ,p.235- 246
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ん治療のために損傷手術を行った患者を用いて神経心理学的研究も行っている。右側損傷3名，左損傷2名を調べた結果，右損傷の場合には手術前後で有意に成績が低下し，一方左損傷の場合には障害がみられず，逆に成績の上昇がみられた。

第3部では1部，2部の統合の試みが述べられ，魚類と哺乳類の中間に位置する両生類が貧弱な空間記憶を示すことから，空間記憶の能力が系統発生の中で独立に獲得された可能性が示唆された。

以上のように本論文は大変意欲的であると同時に極めて慎重に装置・技法の開発を行った優れた研究だといえる。審査段階では，空間記憶が系統発生の中で独立に獲得されたものか，逆に一部の動物で二次的に失われたものかという議論がなされたが，この点については今後の比較研究の成果を待たなくてはならない。また，キンギョという飼育品種が適切な実験動物であるかどうかという議論もあったが，実際の実験実行上には飼育管理，入手などの問題があり，他種での検討は今後の課題であろう。魚類大脳については未解決な問題が多く，背内側部を海馬といってよいかどうかも異論のあるところである。しかし，本研究は機能的側面から背内側部が空間記憶を担うことを明らかにしたものである。NIRSについてはまだ十分に確立された手法ではないという指摘もあった。また，NIRSデータと損傷データの統合も十分ではないという意見も出された。さらに神経心理データについては術後の経過がみられればさらによかったのではないかという指摘もなされた。

このように，いくつかの未解決な点や不十分な部分もあるが，魚類・ヒト研究どちらにおいても，それらはいずれも今後の空間記憶研究に対する重要な問題提起となっており，本論文がまさに先鋭的であることを意味する。本論文は申請者が今後独立した研究者として研究活動を行う資質があることを十分に示したもので博士（心理学）に相当すると判断する。

博士（社会学）［平成18年2月24日］

乙　第4019号　岩田　重則

葬送・墓制の民俗学的研究

〔論文審査担当者〕

主　査　　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇

副　査　　慶應義塾大学名誉教授
　　文学博士　　宮家　　準

副　査　　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　教育学修士　　宮坂　敬造

〔学識認定担当者〕

慶應義塾大学文学部教授
鈴木　正崇

慶應義塾大学文学部教授
宮坂　敬造

内容の要旨

本論文は，日本の葬送・墓制を民俗学的観点から解明しようとこころみたものである。従来，葬送・墓制は，柳田国男『先祖の話』(1946，筑摩書房）を到達点とする祖霊信仰学説のなかで理解されてきた。また，世間一般，社会的にも，葬送・墓制は祖霊信仰の文脈のなかで了解されていることが多い。しかし，こうした通説および一般的社会認識による学問的理解を所与のものとして受容するのではなく，葬送・墓制を正確に観察・調査することにより，改めて資料収集を行ってみると，柳田民俗学のような祖霊信仰学説，および，一般的社会通念としての祖霊信仰の認識，これらでは理解しがたい民俗事象が多いことも事実である。本論文は，こうした民俗学的な通説および一般的社会認識としての祖霊信仰により葬送・墓制の意味を解くのではなく，これらからいったんは思考様式を解き放ち，現前に，あるいは，眼前に展開してきた民俗事象それ自体を着実に分析することにより，新たに，葬送・墓制の民俗学的意味を解明しようとするものである。

従来の柳田民俗学および民俗学の通説では，そのすべてではないにせよ，葬送・墓制をめぐる学説形成にあたって，重要なポイントになる点が，伝承者の解釈をそのまま学問的結論に移行させている点があった。たとえば，柳田の『先祖の話』は，くりかえし行われる年忌供養の最後，33回忌あるいは50回忌の最終年忌に梢付塔婆あるいは二又塔婆が墓地に立てられる事例において，これらを行うと「先祖になる」「生まれかわる」などの説明が伝承者によってなされていることを取り上げ，これら民俗事象への伝承者自身の解釈をそのまま学問的結論とし，最終年忌をして祖霊信仰完成の儀礼として位置づけていた。本来は，伝承者が民俗事象に対してこうした説明を語ること自体が，分析の対象とされるべき資料として扱われるべきはずであったが，そうした当然行われるべき分析が欠如したまま，葬送・墓制を祖霊信仰として理解する通説が形成されてきていた（本論文ではこうした伝承者による解釈を仮に「伝承者解釈」と呼んでいる)。

本論文では，こうした弊を避けるために，「客観」的に観察できる葬送・墓制をめぐる民俗事象を分析の対象とすべき第一の資料としている。たとえば，本論文の第4章「墓制の研究―墓上施設と石塔の不連続性を通して―」では，一般的に，墓であると認識されている石塔と遺体埋葬地点に空間的ズレがあることを，議論の起点としているが，これは，現前に展開する展開する民俗事象を「客観」的に観察して得ることのできた基本的資料であるからである。

本論文では，このように，柳田民俗学がその『先祖の話』などで祖霊信仰学説を提出するにあたって，伝承者解釈への資料的検討および分析を行うことなく，それをそのまま学問的成果として利用してきたことに対して疑義を持ちつつ，観察から獲得した「客観」的資料を重視しそれを資料として集積することにより分析を行っている。もちろん純粋に「客観」的であることはありえず，あくまで，調査者・研究者の「主観」，つまりは調査者・研究者の視点を通してみた「客観」にすぎないが，できるかぎり確実な資料操作を行うためには，こうした作業は不可欠のものであると考えている。

また，本論文における葬送・墓制研究は，そこにひそむ民間信仰的観念を明らかにすることに最大の目的があるので，そのためにも，こうした現前の民俗事象への「客観」的観察は必要不可欠のものである。なぜならば，人間が持つ観念は，現実には，人間の作り出した形象・行為など，そうした多様な行動様式のなかに表出してきている。人間の観念は，観念として抽象化されてかくれているのではなく，多様な行動様式として具象化されていると思われるからである。いわば，葬送・墓制をめぐる民間信仰

的観念は，葬送・墓制における実際の形象・行為となって具体化しているわけである。したがって，民間信仰的観念を解明するためには，それをひそませている具体的な形象・行為を，確実な資料操作によって読み解く作業が重要になるものと思われる。

そして，本論文では，こうした基本的作業の上で，柳田民俗学が無媒介に学問的結論に移行させることのあった伝承者解釈についても分析を行っている。日本の民俗事象では，葬送・墓制だけではなく，さまざまな分野で，こうした伝承者解釈が多く，そうした伝承者自身が伝承してきた民俗事象をどう説明しているのか，それを資料として確実に分析することが欠如していた。そこで，本論文では，如上のような「客観」的資料に基づいて分析を行ったのちに，それとの論理的整合性によって理解することのできる範囲で，伝承者解釈についての分析も行っている。

本論文では，こうした基本的な考え方を第1章「民間信仰研究の課題と方法」として述べ，その上で，下記のような順序で，全体を論述している。以下，各章ごとに内容を整理しておきたい。

○第2章「民俗学方法論の再検討」

第1章「民間信仰研究の課題と方法」で説明した基本的な考え方に基づき，第2章では，本論文のベースとなる基本的方法論について，学史的な検討を行うことを目的としている。具体的には，1910年代の草創期日本の民俗学が持っていた方法論的可能性を，柳田民俗学と折口信夫の民俗学とを比較・検討することにより，本論文が適用すべき基本的方法論を確認する作業を行っている。

折口信夫「髯籠の話」（『郷土研究』第3巻第2号・第3号＋第4巻第9号，1915年4月・5月＋1916年12月）は，神が宿る装置として依代という分析概念を提出したこと でよく知られている。この折口の「髯籠の話」と，柳田の「柱松考」（『郷土研究』第3巻第1号，1915年3月）とを比較・検討してみると，草創期民俗学が持っていた民俗学 方法論の可能性が浮きぼりになる。

折口が分析概念としての依代を提出する契機となっていたのは，だんじりの髯籠を観察していた事実であった。だんじりの上部から放射状に垂れ下がる髯籠を観察しつつ，折口はそれをして神の宿る装置であると考えた。つまりは，だんじりの髯籠への観察をベースとして，折口は依代という分析概念を提出していたわけである。そして，こうした分析概念を設定しつつ，折口は，多様な民俗事象をそれにあてはめていく。たとえば，日蓮宗寺院御会式の万燈，葬式の花籠などの儀礼において，だんじりの髯籠と同様の放射状の形状を持つモノを次々と依代のカテゴリーに含めている。いわば，演繹法的に，あらかじめ分析概念を設定しつつ，それに個別の民俗事象を含ませることにより，その民間信仰的意味を解明しようとしていた。そして，こうした折口の分析方法の起点に位置していたのが，その分析概念を創出するにあたってヒントを提供した，民俗事象への観察であった。

いっぽう，柳田の「柱松考」の分析方法は，演繹法的な方法を採用せず，個別の民俗事象ひとつひとつを例示することにより，民俗事象の意味を解明しようとするものであった。また，柳田民俗学の場合，この事例の提示のしかたにも特徴があり，民俗事象そのものよりも，その民俗事象を示す民俗語彙を中心に資料収集が行われ，議論が展開されていた。帰納法的な資料操作と分析を行っているともいえるが，柳田民俗学の場合，みずからの調査によるものではなく，ほとんどの場合，他者の調査資料を文献学的に収集し，事例の羅列を行うものでもあった。そのために，民俗事象の例示は現象そのものではなく語彙を中心としたものであり，その分析は恣意性をまぬがれえないものであった。

こうした折口の方法と柳田の方法を比較・検討したときに，分析概念を創出し演繹法的に民俗事象の

分析を行った折口に，むしろ，「客観」的分析をするための観察，相互理解を行いやすい分析概念の設定，といった科学的方法が卓抜であったことに気づく。あるいは，「客観」的観察から分析概念を創出し分析を展開するがゆえに，普遍化しやすい分析概念を創出しえたことを確認することができる。

日本の民俗学は，このような折口の観察・分析方法ではなく，むしろ，柳田の系譜のなかで，研究が展開し，また，組織も形作られていったが，草創期日本の民俗学，なかんずく，折口の方法論が持っていたこのような「客観」的観察と，普遍化し得る分析概念の創出は，本論文における民俗事象に対する「客観」的把握方法の基礎として考えることができる。

○第3章「祖霊信仰学説の再検討」

第2章「民俗学方法論の再検討」が本論文における基本的方法論の検討であったので，第3章では，本論文が研究対象として扱う葬送・墓制をめぐる基本的学説の検討を行っている。いわば，第2章「民俗学方法論の再検討」が本論文の基本的方法論の学史的検討であるのに対して，この第3章は本論文の直接的研究対象をめぐる基本的学説の検討である。具体的には，柳田民俗学が『明治大正史　世相篇』（1931，朝日新聞社）第9章「家永続の願ひ」を起点として，『先祖の話』までに総合的学説として到達点に至る祖霊信仰学説の形成過程を追うとともに，それにひそむ問題点を指摘している。

柳田の『先祖の話』は，その刊行はアジア太平洋戦争敗戦後の1946年（昭和21）であったが，執筆は1945年（昭和20）4月から5月にかけて，敗戦直前の，ちょうど沖縄戦が戦われているさなかに行われた。祖霊信仰学説が，この『先祖の話』において，戦時下にまとめられているという事実は，現在では通説として通っている柳田民俗学のこの学説の提出が戦争と関係していたことを示している。たとえば，『先祖の話』は全81節からなるが，その最後から2番目第80節のタイトルは「七生報国」であり，日露戦争の広瀬武夫・特攻機の若者をはじめ楠正成に至るまでの「七生報国」の精神を，「死の親しさ」（第64節のタイトル）・生まれかわり，さらには，そのベースにあると柳田が考える祖霊信仰によって説明しようとするものであった。いわば，『先祖の話』は戦死の精神を，日本人の祖霊信仰という民俗的次元から理解しようとしていた。

柳田民俗学の祖霊信仰学説とは，戦死の精神の民俗学的説明として提出されていたわけである。そして，その際に，具体的な民俗事象として，柳田が取り上げたのが，祖霊信仰の基盤となる家，正月と盆，田の神・山の神の去来信仰，墓制研究であった。特に，山中他界観を軸とする墓制研究が霊肉分離の民俗的認識から説明され，遺体が埋葬されていない石塔を祖霊（霊魂）祭祀施設として重視したことは，遺体（肉体）ではなく祖霊を重視するその後の民俗学の通説を形成するにあたって大きな力があった。しかも，この祖霊重視の墓制研究によって，『先祖の話』は，正月と盆，田の神・山の神の去来信仰などすべてを祖霊信仰の文脈に総合し組み込むこととなった。いわば，多様な民俗事象を祖霊信仰で理解する総合的学説として，柳田民俗学の祖霊信仰学説は形成されていたわけである。そして，その総合的学説の結節点に，祖霊信仰を軸とする墓制研究が位置していた。

したがって，柳田民俗学の祖霊信仰学説とは，「七生報国」と生まれかわりの精神を民俗的次元から理解しようとする目的を持ち，そして，墓制研究を結節点としてその学説が形成されたといえる。つまりは，特定の目的をもって，現在通説となっている祖霊信仰学説および墓制研究が展開されていたのであり，こうしたことを考慮した上で，日本の葬送・墓制研究を展開する必要があるといえよう。戦死の精神を説明するために祖霊信仰学説が提出され，その重要なポイントに墓制研究が位置していたのであり，従来の通説を再検討するためには，こうした意味で，墓制をとらえなおす必要があるわけである。

○第４章「墓制の研究―墓上施設と石塔の不連続性を通して―」

本論文は，第２章「民俗学方法論の再検討」で基本的方法論の，第３章「祖霊信仰学説の再検討」で研究対象に即した通説の検討を行い，その上で，この第４章以下において，具体的分析を行っている。まず，この第４章では，日本の墓制を祖霊信仰学説によって理解することが適切であるのか，それを，墓とは何か，という課題のもとに分析を行っている。柳田民俗学をはじめ従来の通説では，霊肉分離の考え方により，遺体埋葬地点上にない石塔を墓であるとし，それを祖霊を祀る場所であるとしていた。しかし，そうした通説は，第３章「祖霊信仰学説の再検討」で検討したように問題点をはらむ学説であった。本論文のこの第４章では，遺体の埋葬されていない石塔ではなく，遺体埋葬地点そのものを墓であるとする，ごく当然の議論を展開している。

ごくふつうに参与観察を行うと，もっとも一般的な単墓制と呼ばれる墓制をとってきたところでも，遺体埋葬地点と石塔建立地点には空間的にズレがあるのがふつうであることに気づく。また，遺体埋葬から数年を経て（ふつう年忌供養のとき）)石塔が建立されるのがふつうであり，遺体埋葬と石塔建立は時間的にズレがあった。空間的にも，時間的にも，遺体埋葬と石塔は不一致であった。そして，遺体埋葬地点上には，遺体埋葬後，枕石をはじめ多様な墓上施設が設営される。こうした民俗事象の事実にかんがみ，本論文では，石塔ではなく，遺体埋葬地点とその上に設営される墓上施設こそが墓ではないのか，そうした議論を展開している。

墓上施設を丁寧に観察してみると，遺体埋葬地点上に枕石や鎌が置かれ，また，その周囲をメハジキ・オオカミハジキ・イヌハジキなどと呼ばれる割竹などでかこっているものが多い。つまり，墓上施設は単独の装置であるのではなく，多様な装置が複合しており，本論文では，こうした複合に注目している。たとえば，枕石は川原など境界的空間から持ってこられ，遺体埋葬地点上に置かれるわけであるが，それをさらに，メハジキなどの割竹が三次元空間を設営する形で覆っている構図である。いわば，遺体埋葬地点上にメハジキなどでウツボ空間が設営され，その中に，境界的空間からの枕石が位置している。本論文は，観察の結果得られたこうした構図をして，境界的空間から移動させられた枕石を来訪神の依代ではないかとし，また，意図的に設営されたウツボ空間をその来訪神が遺体に伴う死霊を鎮め，封鎖するための装置ではないかと位置づけている。

これらのほかに，この第４章は，墓上施設としての鎌や，遺体埋葬地点上で焚かれる火（「墓上火」とした）を分析し，これらも，枕石と同様，死霊を鎮めるための来訪神の依代ではないかとしている。また，墓上施設に僧侶など仏教の関与が少ないことも考慮したとき，こうした死霊の鎮魂を行う遺体埋葬地点および墓上施設こそが墓ではないのか，そうした結論を導きだしている。それにより，仮に，遺体埋葬地点上に設営されていない石塔が祖霊のための祭祀施設であるとしても，むしろ，それは近世社会以降の仏教の民間への浸透に伴い発生してきた装置にすぎないのではないかとしている。つまり，ここでの議論を柳田民俗学などの通説と対照させたとき，通説における「固有信仰」としての祖霊信仰はむしろ仏教の浸透による後発的発生にすぎなかったといえる。

○第５章「葬送儀礼の研究―最終年忌塔婆の比較・分析を通して―」

第４章「墓制の研究―墓上施設と石塔の不連続性を通して―」では，遺体および遺体埋葬地点を中心として日本の墓制を分析することにより，それらが，柳田民俗学および通説的な祖霊信仰学説で理解されるような装置ではないことを明らかにしたので，この第５章では，葬送儀礼なかんずくその最終段階に位置する最終年忌の民俗事象を，同様の視点から考察している。第３章「祖霊信仰学説の再検討」で

検討した柳田国男の祖霊信仰学説は，戦争の精神としての「七生報国」，さらには，そのベースとなる生まれかわりを祖霊信仰から説明しようとしていた。その際，柳田民俗学が重視したのは，最終年忌に墓に立てられる梢付塔婆・二又塔婆などの最終年忌塔婆であった。これらの塔婆を建立するときに伝承者自身が「生まれかわる」「先祖になる」などの説明を行う伝承者解釈があることをもってして，柳田民俗学は，祖霊信仰の完成とみなしていた。しかし，この第4章では，このような伝承者解釈ではなく，最終年忌塔婆の民俗事象を資料として集積し，それを他の類似する民俗事象と比較・検討することにより，その民間信仰的意味を明らかにしている。

具体的には，最終年忌塔婆の事例を収集しその特徴を抽出してみると，先端に枝葉を残した梢付塔婆には杉・椎・たぶなど常緑樹が，先端が二又に分かれた二又塔婆には落葉樹が使われていることが多いことから，梢付塔婆＝常緑樹を葬送儀礼などにおける同様の民俗事象と比較・検討し，二又塔婆＝落葉樹についても特にその形状に留意しつつ他の民俗事象と比較・検討を行っている。

まず，梢付塔婆については，関東地方・東北地方に濃厚に分布する新盆の高灯籠との比較・検討を行った。これについては，単に高灯籠だけではなく，それと新盆と連続する風祭などの行事の民間信仰的意味をとらえることにより，高灯籠がかならずしも祖霊信仰的装置ではないことを指摘しつつ，さらにそれにより，梢付塔婆についても，従来の通説のような祖霊信仰的装置としてとらえることが難しいことを指摘している。また，山形県・新潟県の一部の地域に，最終年忌にこうした生木の塔婆ではなく，イシボトケと呼ばれる楕円形の石を川原から拾ってきて，それを墓地におさめる民俗事象がある。これについては，第4章「墓制の研究―墓上施設と石塔の不連続性を通して―」で検討した枕石と類似する民俗事象でもあり，こうした梢付塔婆とイシボトケの民俗事象から，最終年忌塔婆に来訪神の依代としての意味を抽出している。

次に，二又塔婆については，先端が二又に分岐するその独特の形状に類似性がある民俗事象との比較・検討を行った。具体的には，千葉県・茨城県・栃木県など関東地方から福島県・宮城県の一部の地域にかけて，犬など動物供養のために，二又塔婆と同様の形状を持つ犬塔婆を立てる民俗事象があるので，それとの比較・検討である。特に，犬塔婆がムラ境など境界的空間に位置することに注目し，こうしたことから逆照射し，二又塔婆を祖霊信仰で把握することの難しさを指摘している。また，庚申信仰で立てられる梢付塔婆・二又塔婆についても，庚申信仰が厄除け的性格が強いことから，同様の意味を抽出している。

こうした梢付塔婆・二又塔婆の分析により，柳田民俗学がその祖霊信仰学説において重要視した最終年忌塔婆の民俗事象は，むしろ死霊を鎮めるための来訪神の依代として理解されるべきであり，祖霊信仰の装置としてとらえることは困難であるという指摘を行っている。さらに，その上で，従来の柳田民俗学および通説が利用してきた伝承者解釈，たとえば，この場合は「先祖になる」「生まれかわる」などと説明される最終年忌塔婆の伝承者解釈とは，祭祀の終了を意味する説明にすぎないのではないか，という指摘を行っている。

○第6章「位牌の研究―祀りすての民俗事象を通して―」

柳田民俗学の祖霊信仰学説および通説において，祖霊信仰を示すモノとして理解されてきた位牌についても，そのすべてを従来のような祖霊信仰によって理解することは難しいのではないかと考えられる。位牌は，もともと，儒学・禅宗の影響により鎌倉・室町期に日本に輸入されたモノであった。そして，仏教の影響のもとに近世以降民間に浸透していったが，現在存在する位牌の形態を見ると，内位牌

(通常はこれが位牌とみなされる)，寺位牌，野位牌，紙位牌，門牌の5種類がある。そして，この第6章では，これらに共通する位牌祭祀のありように，祀りすてがあることに注目している。

静岡県東部・伊豆地方には，ハマオリと呼ばれ，葬式の遺体（遺骨）埋葬後の帰宅途中に，川原・海浜で野位牌を流す儀礼がある。特に，御殿場市・裾野市・三島市などでは，単に流すだけではなく，川原などに置いた野位牌に石を投げつけ，押し倒して流している。こうした，一見，奇妙なハマオリの資料を収集してみると，現在では，葬送儀礼全体の簡略化の影響を受け，葬式当日の儀礼となっているが，もともとは，四十九日(あるいは三十五日)の忌み明けのときの儀礼として，それが行われていたことがわかる。この第6章では，こうした，野位牌を流してしまうことの意味を，他の儀礼との比較によって明らかにし，位牌の持つ意味を明らかにしようとしている。

具体的な分析としては，このハマオリが行われている地域に連続する，静岡県中部地方における，同様の葬送儀礼の文脈に位置するモノを比較・検討の対象とした。静岡県中部地方では，四十九日（あるいは三十五日）をユミアケ（「忌み明け」であろうがユミアケと発音される）に，川原あるいは海浜にいき，鼻緒を石で切った草履を流す儀礼がある。静岡県東部・伊豆地方のハマオリにおいて野位牌を流す儀礼と同じ葬送儀礼の文脈に，この鼻緒を石で切った草履が位置しているわけである。いわば，儀礼的にみて，野位牌の代替物として草履があると考えている。こうした野位牌と草履との対照から，この第6章では，その儀礼が忌み明けに行われていることに注目しつつ，ここでの野位牌と草履とは，祖霊信仰というよりも，死霊の持つケガレとでもいうべき観念を除去するためのモノとしての意味があるのではないかと指摘している。

本論文は，こうした具体的分析により導きだすことのできた各章ごとの分析と結論を，最後の「結論」において要約している。本論文では，従来の通説のような，葬送・墓制を祖霊信仰学説によって理解するのではなく，死霊の鎮魂であるととらえている。そして，祖霊信仰については，むしろ後発的な受容として，仏教の民間レベルへの浸透とも関連して，形成された観念ではないかと考えている。

論文審査の要旨

本論文は，日本の葬送・墓制を民俗学的観点から解明しようと試みた独創的な業績である。従来，葬送・墓制は，柳田国男『先祖の話』(1946)を到達点とする祖霊信仰学説の中で理解され，世間一般でも，その文脈で了解されてきた。しかし，本論文は各地の葬送・墓制の実態を正確に観察・調査し，祖霊信仰としては理解しがたい民俗事象を指摘した上で，新たな説を提示する。学問上の通説や一般的社会認識を所与とせずに，葬送・墓制の意味を祖霊信仰以外の観点から読み解く可能性を体系化した。目次は以下のとおりである。

第1章　民間信仰研究の課題と方法
第2章　民俗学方法論の再検討
　1　折口学の分析概念
　2　柳田民俗学の帰納法
　3　J.G.フレイザー『金枝篇』の受容
　4　草創期民俗学の分析方法
第3章　祖霊信仰学説の再検討

1 「家永続の願ひ」の虚構
2 柳田国男の社会的使命感
3 戦時下の柳田民俗学
4 『先祖の話』の祖霊信仰学説
5 柳田民俗学の「七生報国」
6 祖霊信仰学説の形成
7 葬送・墓制研究の課題
第4章 墓制の研究―墓上施設と石塔の不連続性を通して―
1 枕石と石塔
2 墓上施設の複合性
3 墓上施設研究史
4 ウツボの中の石
5 ウツボの地域的特徴
6 「魔除けのため」の墓上鎌
7 墓上火と盆の迎え火・送り火
8 火葬の墓上施設
第5章 葬送儀礼の研究―最終年忌塔婆の比較・分析を通して―
1 最終年忌塔婆研究史
2 最終年忌塔婆の類型
3 高灯籠に来訪する神
4 「柱松」に来訪する神
5 川原から来訪するイシボトケ
6 犬塔婆と二又塔婆の儀礼空間
7 仏教民俗としての最終年忌塔婆
8 伝承者解釈の語りの意味
9 仏教的供養と死霊の鎮め
第6章 位牌の研究―祀りすての民俗事象を通して―
1 位牌研究史
2 位牌の定義
3 石をぶつけられる位牌
4 ハマオリの空間
5 位牌と草履
6 投石儀礼と位牌
7 死霊の忌避
8 仏教民俗としての位牌
結論

第1章「民間信仰研究の課題と方法」では、従来の民間信仰の研究を批判的に検討する。本論文の目

的は，葬送・墓制にひそむ民間信仰的観念を明らかにすることとし，観念は実際の形象・行為として具象化・表現されると考えて，研究対象を墓上施設・最終年忌塔婆・位牌に設定する。収集した資料から共通項を抽出して，その特徴を他の民俗事象と比較し，確実な資料操作によって読み解く。その場合，伝承者の語りや解釈を無批判的に受け取って，学問上の結論に移行することには問題があると考える。例えば，柳田國男の『先祖の話』は，三十三回忌や五十回忌の最終の年忌供養に梢付塔婆あるいは二又塔婆を墓地に立てる事例について，「先祖になる」「生まれかわる」などの伝承者の説明（伝承者解釈）をそのまま学問的結論とし，最終年忌を祖霊信仰完成の儀礼として位置づけた。本来は，民俗事象に関しての伝承者の説明自体を，分析対象の資料として扱うべきであったが，分析が欠如したまま，葬送・墓制を祖霊信仰として理解する通説が形成されたと批判する。本論文では，こうした弊害を避けるために，観察から獲得した「客観」的資料の集積に分析を加える。もちろん純粋に「客観」的ではありえず，あくまで調査者・研究者の視点を通してではあるが，柳田説の資料操作の不備を克服するべく，可能なかぎり確実な資料操作を行う。本論文では，こうした基本的作業の後に，論理的整合性によって理解できる範囲で，「伝承者解釈」も分析対象とする。

第2章「民俗学方法論の再検討」では，本論文の基本的方法論について，民俗学草創期の学史的な検討を行なう。具体的には，柳田國男と折口信夫の1910年代における業績を比較・検討して方法論的可能性を抽出し，本論文が適用すべき基本的方法論を確認する。折口信夫「髯籠の話」(1915・1916)は，神が宿る装置としての依代という分析概念を提出した有名な論考であるが，これと柳田の「柱松考」(1915)を比較・検討すると，未だ十分に開拓されていない民俗学方法論の可能性が浮き彫りになる。折口は，だんじりの上部から放射状に垂れ下がる髯籠を観察して，神の宿る装置であると考えて依代の概念を提出した。折口は，観察を基礎に分析概念を提出し，多様な民俗事象にあてはめていく。例えば，日蓮宗寺院の御会式の万燈，葬式の花籠などの儀礼装置で，髯籠と同様の形状を持つモノを次々と依代のカテゴリーに含めている。起点は民俗事象の観察に置き，演繹法的に分析概念を設定して，民間信仰の意味を解明しようとした。一方，柳田の「柱松考」は，演繹法的な方法を採用せず，個別の民俗事象を例示して，意味を解明しようとする。また，柳田の場合，事例の提示の仕方に特徴があり，民俗事象そのものよりも民俗事象を示す民俗語彙を中心に資料収集が行われて議論が展開された。帰納的な資料操作と分析を行うが，柳田は自らの調査によるのではなく，大半は他者の調査資料を文献学的に収集して事例の羅列を行なった。そのために，民俗事象の提示は現象そのものではなく語彙を中心とする以上，現象に即した分析から離れるため，その理解に恣意性をまぬがれえない。折口と柳田の方法を比較・検討すると，分析概念を創出し演繹的に民俗事象を把握する折口は，「客観」的観察から普遍化しやすい概念を創出して分析を展開するという科学的方法が卓越していたと言える。しかし，日本の民俗学は，折口の観察・分析方法ではなく，柳田の学問の系譜の中で研究が展開し，組織も形作られていった。本論文では，柳田を批判的に捉え，草創期日本の民俗学で折口の方法論が持っていた「客観」的観察と，普遍化しうる分析概念の創出を評価して，民俗事象に対する把握方法の基礎とする。

第3章「祖霊信仰学説の再検討」では，本論文が研究対象として扱う葬送・墓制をめぐる基本的学説の検討を行なう。具体的には，柳田國男の『明治大正史　世相篇』(1931)第9章「家永続の願ひ」を起点とし，『先祖の話』で到達点となる祖霊信仰学説の形成過程を追究して問題点を指摘した。柳田の『先祖の話』は，1946年に刊行されたが，執筆は1945年（昭和20）4月から5月で，敗戦直前の沖縄戦の最中に行われた。現在では通説とされている祖霊信仰学説が戦時下にまとめられたという事実は，この

説の背景となった柳田の問題意識が戦争と関係が深いことを示している。例えば，『先祖の話』全81節の最後に近い第80節は「七生報国」と題され，日露戦争の広瀬武夫，特攻機の若者，楠木正成に至るまでの「七生報国」の精神を，「死の親しさ」（第64節の題名）や「生まれかわり」，そしてその基礎にあると柳田が考えた祖霊信仰で説明しようとする。いわば，『先祖の話』は戦死の精神を，日本人の祖霊信仰という民俗的次元から理解する試みであった。そして，その際に，具体的な民俗事象として取り上げたのが，祖霊信仰の基盤となる家，正月と盆，田の神・山の神の去来信仰，墓制である。特に，山中他界観を軸として墓制が霊肉分離の民俗的認識から説明され，いわゆる「両墓制」に注目して遺体が埋葬されていない石塔を祖霊（霊魂）祭祀施設として重視したことは，遺体（肉体）ではなく祖霊を中心とするその後の民俗学の通説の形成に大きな力があった。『先祖の話』は多様な民俗事象を祖霊信仰で理解する総合的学説として形成され，結節点には墓制が位置していた。柳田民俗学は，戦死者霊魂の行方に想いを巡らし，戦死の精神を柳田の願いの籠った思想に立って説明するという特定の目的で祖霊信仰学説を展開したのであり，この点を考慮して日本の葬送・墓制研究に関する従来の通説を再検討するべきだとして，祖霊信仰の中核をなす墓制を捉え直す必要を説く。

第4章「墓制の研究」では，第2章と第3章を踏まえて具体的分析を行ない，日本の墓制を祖霊信仰学説で理解することが適切か，という課題が提示される。一般には墓と認識されている石塔と遺体埋葬地点に空間的なズレがあることを，議論の起点とする。これは現前に展開する民俗事象を「客観」的に観察して得ることのできた基本的資料であるという。柳田民俗学をはじめ従来の通説では，遺体埋葬地点上にない石塔を墓とし，祖霊を祀る場所としていたが，本論文では，石塔は墓ではなく，死霊の鎮魂を行なう遺体埋葬地点と墓上施設こそが墓である，という議論を展開している。一般的に単墓制とされる墓制でも，遺体埋葬地点と石塔建立地点は空間的にズレているのが普通で，遺体埋葬から数年を経て，通常は年忌供養の時に，石塔が建立される。遺体埋葬と石塔建立は空間的にも時間的にも異なる。遺体埋葬地点上には，枕石や鎌が置かれ，周囲をメハジキ・オオカミハジキ・イヌハジキなどと呼ばれる割竹で囲うなど，三次元のウツボ空間を意図的に設営する。結論から言えば，この複合的な空間は遺体に伴う死霊を鎮めて封鎖する装置で，枕石や鎌，遺体埋葬地点上で焚かれる火（墓上火）は，死霊を鎮めるための来訪神の依代と考える。また，墓上施設には僧侶など仏教の関与が少ないので，民俗的慣行では死霊の鎮魂を行う遺体埋葬地点や墓上施設こそが墓であるという結論を導き出す。更に，仮に石塔が祖霊のための祭祀施設であるとしても，近世社会以降の仏教の民間への浸透に伴う発生ではないかという。したがって，柳田國男のいわゆる「固有信仰」としての祖霊信仰は仏教の浸透による後発的発生に過ぎなかったとする。以上の点から，日本の墓制を遺体および遺体埋葬地点を中心として分析して，祖霊信仰学説で理解されるような装置ではないことを明らかにした。

第5章「葬送儀礼の研究」では，葬送儀礼の最後に位置する最終年忌を同様の視点から考察している。祖霊信仰の確立にあたって柳田國男が重視したのは，最終年忌に墓に立てられる梢付塔婆・二又塔婆などの最終年忌塔婆であった。これらの塔婆を建立する時に「生まれかわる」「先祖になる」などと説明する伝承者解釈があることから，祖霊信仰の完成と見なしたのである。しかし，具体的に最終年忌塔婆の民俗事象を資料として集積して特徴を抽出すると，先端に枝葉を残した梢付塔婆には杉・椎・たぶなど常緑樹が，先端が二又に分かれた二又塔婆には落葉樹が使われることが多い。類似する民俗事象と比較・検討すると，梢付塔婆は，関東や東北に分布する新盆の高灯籠と類似し，後者は風祭にも使われることから祖霊信仰の装置ではなく，来訪神の依代であるという。最終年忌にイシボトケと呼ばれる楕円

形の石を川原から拾ってきて墓地に納める民俗事象（山形県・新潟県の一部の地域にある）も枕石と類似し，石は依代と考える。一方，二又塔婆は，関東から東北に分布する，動物供養に立てる犬塔婆と類似する。村境などの境界空間に犬塔婆は位置し，神招きの意味があるという。また，庚申信仰で立てられる梢付塔婆・二又塔婆も，厄除け的性格が強い。梢付塔婆・二又塔婆は死霊を鎮めるための来訪神の依代として理解されるべきであり，祖霊信仰の装置ではないという。そして従来の柳田民俗学や通説が利用してきた伝承者解釈，例えば「先祖になる」「生まれかわる」などと説明される最終年忌塔婆の解釈は，祭祀の終了を意味するに過ぎないのではないか，と結論づける。

第６章「位牌の研究」では，柳田民俗学の祖霊信仰学説や通説では，祖霊信仰を表すモノとして理解されてきた位牌について再検討を加える。位牌は，もともと，儒学・禅宗の影響により鎌倉・室町期に日本に輸入され，仏教の影響で近世以降民間に浸透したが，現在の位牌の形態を見ると，内位牌（通常はこれが位牌と見なされる），寺位牌，野位牌，紙位牌，門碑の五種類がある。本章では，これらに共通する位牌祭祀のありように，祀り棄てがあることに注目する。静岡県東部・伊豆地方には，ハマオリと呼ばれ，葬式の遺体（遺骨）埋葬後の帰宅途中に，川原・海浜で野位牌を流す儀礼がある。特に，御殿場市・裾野市・三島市などでは，川原などに置いた野位牌に石を投げつけ，押し倒して流す。ハマオリの資料を収集してみると，現在では葬式当日が多いが，元来は四十九日（あるいは三十五日）の忌み明けの儀礼として行われていたという。こうした，野位牌を流すことを，他の儀礼と比較し，位牌の持つ意味を明らかにする。具体的には，ハマオリ地域に隣接する静岡県中部地方の事例で，ユミアケ（忌み明け）の四十九日（あるいは三十五日）に，川原あるいは海浜にいき，鼻緒を石で切った草履を流す儀礼に注目する。静岡県東部の野位牌を流す儀礼と同じ葬送儀礼の文脈に，中部地方の鼻緒を石で切った草履が位置しているのであり，野位牌と草履は同様の機能を持つと考えられる。忌み明けの儀礼であることに注目し，野位牌と草履は，死霊の持つケガレとでもいうべき観念を除去するモノという意味があるのではないかと指摘する。位牌は祖霊信仰に関わるモノに限定されないと考える。

結論として，本論文は，葬送・墓制を，通説とされている祖霊信仰学説で理解するのではなく，死霊の鎮魂や来訪神による鎮圧ととらえる。祖霊信仰は後発的な受容であり，仏教の民間レベルへの浸透によって形成された観念と考えた。来訪神には祖霊の性格は認められない。第２章と第３章では，緻密な学説史の検討による方法論の提示と，『先祖の話』の詳細な読解による祖霊信仰への疑問点の提示と批判が行われ，第４章と第５章では，膨大な資料を，確実な資料操作で「客観的に」比較検討して新説が提示された。その要点は，方法論としては，①従来の研究が当事者の意味解釈（伝承者解釈）と，学問を行う研究者の解釈を混同し，当事者解釈自体を民俗事象と捉える視角が不明確であったことへの批判，②資料を集積して比較する帰納法と，概念を前提に分析する演繹法の融合の具体的な提唱，③「具象化」された民俗資料を地域別に整理して共通項を抽出し分析する緻密な方法の提示，の３点が挙げられる。神観念や霊魂観については，①祖霊信仰学説の本格的な批判と通説の形成過程の検討，②生活世界へ外部から訪れ強い力で依代によりつき，死霊など災厄を鎮め封鎖する来訪神の強調，③祖霊信仰を仏教民俗として捉え二次的形態として位置付けること，の３点に要約できる。

本論文は極めて独創的で知的興奮を呼び覚ますが，いくつかの課題は残されている。第一は，共時的分析によって，新しい見解を導き出したが，逆に言えば歴史性を取り込んだ通時的分析との補完が課題として残されている。近世のイエ制度の確立で成立した祖霊信仰という歴史的文脈や，イエ永続の願いという社会結合が近代に蒙った変動の影響はやはり無視できない。第二は，抽象化した「理念型」的な

思考で，日本全国一律に適用できるような共通性や普遍性を強調することは，本質主義であるという批判を逃れられない。地域の文脈に沿って考えることや，各地の差異の生成理由を考察する必要がある。第三は，個々の事例に多様な解釈を導入することである。例えば，最終年忌塔婆には，ホトケからカミへという観念による流動性があり，位牌には祀り棄てだけでなく，霊魂の依り代の意味がある。死者の霊魂は和やかさと荒々しさという二面性を持ち，人々は浄化（祀り上げ，カミへの転生），畏れ（シズメ，供養），恐怖（祀り棄て）など複雑に対応して，一つに収斂できない。第四は，荒ぶる死霊を鎮めるのは来訪神だけでなく，僧侶や修験がタタリを鎮める役割を担ったのであり，宗教的職能者の関与を問う必要がある。第五は，伝承者解釈を素直に受容し，個々の語りから導き出される死生観の多様性や複雑な感情をすくい上げて新たな民俗理解の可能性を呼び起こすことである。

本論文の特徴は，通説への徹底的な懐疑と批判にあり，柳田國男の壮大な「祖霊信仰一元モデル」に対抗する「死霊・来訪神複合モデル」を構築しようとした，独創性に満ちた論文として高く評価できる。幾つかの課題は残るものの，独創と創意に満ちており，人間の生活と知識を体系的に整理して社会的実践に活用するという民俗学の新たな方向性を指し示す論文として，博士（社会学）の学位の授与に値するものと判断する。

博　士（教育学）［平成 18 年 4 月 19 日］

甲　第 2615 号　垣花真一郎

幼児の平仮名読み習得における類推の役割

〔論文審査担当者〕

主　査　　慶應義塾大学言語文化研究所教授・大学院社会学研究科委員
　　Ph.D.　　大津由紀雄

副　査　　千葉大学教授
　　博士（人文科学）　　稲垣佳世子

副　査　　国際基督教大学教授
　　Ph.D.　　日比谷潤子

内容の要旨

入門期の読み習得における最初の課題は，文字単語を正確かつ迅速に音韻に変換する技能，つまり復号化 (decoding) の技能を獲得することである。この課題がいかに達成されるかについて，これまでの平仮名習得研究は，アルファベット圏の知見を導入することで進展してきた。アルファベット圏，特に英語圏において蓄積されてきた知見とは，復号化技能の獲得は音韻意識の発達と関係しているということである。音韻意識とは，心内の音韻的単語表象を一定の大きさに分節化し，自覚化する能力のことである。これができない限り，文字単語と音韻単語の対応を取ることができず（たとえば，/k/, /æ/, /t/⇔ cat），復号化技能の獲得に困難が生じるというわけである。実際に，英語圏においては，音素レベルの音韻意識発達と復号化（単語読み上げ）の習得度との関係が，数多くの研究によって見出されている（e.g., 詳しくは，Adams, 1990; Share, 1995 など）。こうした研究を受け，平仮名習得研究においても，平仮名に対応する音節の音韻意識，すなわち音節意識の獲得 (/neko/→/ne/, /ko/) と平仮名習得の関係の